

説教題：「**祈りの家と呼ばれる**」

聖書箇所：イザヤ書56章1-8節、マタイによる福音書 21章12-17

説教者：秀島行雄牧師 招詞：讚美歌93-1-24 交読詩編：詩編100編1-5節（109頁）

讚美歌：83/11（感謝にみちて）/361（この世はみな）/81（主の食卓を囲み）/27

「今週の聖句」〔わたしは彼らを聖なるわたしの山に導き、わたしの祈りの家の喜びの祝いに、  
連なる

ことを許す。…わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる。〕（イザヤ書

56：7）

「牧師室の窓」 「新年に御言葉読みて主の愛の平和の実現切に祈りつ」

「AI(エーアイ)の本格稼働する年に聖書の言葉如何に届かむ」

(1)皆様、新年おめでとうございます。今年**は2026年**、日本の和暦で言いますと令和8年、平成では通算38年、昭和の通算では101年になります。直近の数十年間を十年単位で区切りましても、時代が、社会が、大きく変化しています。昨年までは人工知能AIが徐々に広がってきましたが、今年**は人工知能AIが更に大きく進展する年と推測**されます。と言うことは、産業構造が変わり、仕事の働き方や学校での学び方が激変することになるでしょう。21世紀の最初の四分の一(第1四半期)が終わり、2回目の四分の一(第2四半期)に入ります。これからの時代は、激動の時代になることは明白です。私たちは何を頼りにして、どの様に生きれば良いのでしょうか。本日の聖書箇所はその様な疑問に私たちを勇気づけてくれると私は思います。

…お正月のテレビ報道では、著名な神社仏閣での初詣でに多くの人たちが詣でたことが報じられていました。正月のみ、年1回にて、幸せを願う人々の姿です。教会では毎週礼拝を行なっています。1年間に52週間あり、礼拝が行なわれています。ご都合が合わない時には欠席されても構いません。私は若い頃に国際空港で働いていました。日勤と夜間との勤務があり、日曜日が必ずしも休日ではありませんでした。仕事の多様化や生活の事情により、日曜日の主日礼拝に出席できないことがありますでしょう。その様な時には礼拝が行なわれていることを心の片隅に覚えて頂ければ宜しいのです。そのことが、皆様と主なる神との距離を安定的にします。加えて、この世的に申し上げれば、皆様の人生を注意深く歩もうとする力が湧いてくることでしょう。注意深さは大切です。旧約の箴言にはそのことが書かれています。

(2)きょうの聖書箇所はマタイによる福音書です。同様な内容の記事が他の3福音書、つまり、4福音書の全てに記されています。多少の違いがありますが、いずれもエルサレム神殿の中での出来事でした。ユダヤ教の祭りの中で最も重要な過越しの祭(後のキリスト教の行事であれば、復活祭/イースターの時期)が近づいており、イエス様と弟子たちはナザレ地方からサマリア地方を經由してエルサレムの来られたのです。重要な過越しの祭が近づきつつあり、イエス様はエルサレム神殿に来られました。

神殿の中の配置について簡単に理解をしますと次に様になります。抑々(そもそも)前提として、誰でもこのエルサレム神殿に入ることは出来ません。ユダヤ教徒でなければ神殿に入ることは出来ませんでした。現代の日本には外国人観光客が多く来て、奈良や京都・東京などなどの神社仏閣に参拝・参詣していますのとは異なっています。だいぶ前の事です

が、私がローマのサンピエトロ大寺院に行きました時には、服装の規定(ドレス・コード)があり、肌が露わとなる半ズボンでの観光は禁じられていました。

…元に戻りまして、エルサレム神殿の門を入りますと、そこは広場になっています。「異邦人の庭」と言われています。ユダヤ教に改宗した外国人はこの庭まで入ることが出しました。この庭にはきょうの聖書箇所のマタイ伝21章12節に書かれている「両替人の台」や「鳩を売る者の腰掛け」が置かれていました。「異邦人の庭」と言われるくらいですから、当時はユダヤ教に改宗した外国人が多くいたものと推察されます。この「異邦人の庭」から奥に入るためには、「美しい門」を通して「婦人の庭」に入ります。

**(3)**「美しい門」については、新約聖書の使徒言行録第3章に次のような記事が書かれています。(217頁です)お聞き下さい。

〔使徒言行録(3:1)ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。(3:2)すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。(3:3)彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。(3:4)ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。(3:5)その男が、何かもらえんと思つて二人を見つめていると、(3:6)ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」(3:7)そして、右手を取つて彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、(3:8)躍り上がつて立ち、歩きだした。そして、歩き回つたり躍つたりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入つて行った。(3:9)民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。(3:10)彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座つて施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こつたことに我を忘れるほど驚いた。〕「異邦人の庭」には様々な人生ドラマがあつたのです。婦人、つまり、女性はこの「婦人の庭」まで入ることが認められており、イスラエル人のユダヤ教の男性はその次の庭である「イスラエル人の庭」まで入ることが認められていました。その奥に「祭司の庭」があり、その奥に「聖所」(聖なる所)、更に奥には「至聖所」(至聖所の「至」とは至る、極まる、最高の、と言う意味です)、夫々の「場所・空間」には限定された人々のみが入ることが指定されていたのです。

…話は飛びますが、イエス様が十字架の上で息を引き取られる時の様子がマタイ伝27章50節と51節(58頁の下の段)に書かれています。〔マタイ伝(27:50)…イエスは再び大声で叫び、息を引き取られた。(27:51)そのとき、神殿の垂れ幕が上から下まで真つ二つに裂け、地震が起こり、岩が裂け〕この51節の「上から下まで真つ二つに裂け」た「神殿の垂れ幕」とは聖所の入口にある垂れ幕、及び、至聖所を囲む垂れ幕が裂けて、「祭司」のみが入ることを許されていた特別の場所に、全ての人々が神に近づくことが可能となつたことを象徴的に表しています。また、神が閉じ込められた場所におられるのではないことも示しています。…状況が何気なく書かれている事柄にも、奥が深いですね。

**(4)**12節です。〔(マタイ伝21:12)それから、イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いをしていた人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けを倒された。〕ここに「両替人・鳩を売る者」と書かれています。「両替」とは、エルサレム神殿に献げる献金として用いられていた、謂わば、神殿内でのみ通用するお金(神殿の外=人々の社会では使う

ことが出来ない金具)に両替する必要があり、そのような制度にしていたのです。この制度は、神殿内で通用するお金とは、物品の売買と言う交換性を持たせない一方的な売却であり、加えて、強制的な値付けとなります。従って、制度的に富の略奪が行なわれる仕組み・システムになっています。イエス様が13節で「それを強盗の巣にしている」と言っておられるのはこのシステムを見抜いておられたからと思われまます。現代の外国為替とは異なります。外国為替には綿密なネットワーク(コルレスポネント網)による交換性・流通性があり、合理性・妥当性がなくてはなりません。その仕組みの上で、通貨売買の洞察力と決断力が求められます。

加えて、12節に「鳩を売る者」と書かれていますのは、生贄(いけにえ)用の献げ物である動物です。「鳩」を代表にして「鳩」のみならず、羊などの動物が売られていました。献げ物の動物は傷があっては規定違反になりますので、持参することは出来ず、この神殿の庭で買い求めなければなりません。この献げ物の売却も一方的な売却、強制的な値付けとなり、制度的に富の略奪が行なわれる仕組み・システムです。イエス様は13節で「それを強盗の巣にしている」とこのシステムを見抜いておられるのです。

この様な制度・システムは近代・現代社会でもあります。唐突に思われるかも知れませんが、特に著しいのは、近代憲法であった明治憲法に対して、昭和時代の軍隊軍閥が「統帥権」という暴力装置を作り上げてこの国や諸外国に甚大な被害をもたらしました。現在注目しなければならないのはお米(コメ)やお薬(クスリ)の流通に関する明朗性と価格の妥当性です。また、物品の価格と労働分配率の妥当性も検証対象となります。政府の政策実行力、議会・議員の判断力が今後の日本の発展には不可欠であります。なお、この13節を読みますと、イエス・キリストは律法(つまり、法律)を学ばれただけでなく経済を見る目がおありだったと推測されます。

(5) もう一度13節を見てみましょう。〔(21:13)そして言われた。「こう書いてある。『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』／ところが、あなたたちは／それを強盗の巣にしている。』〕 イエス様は「こう書いてある」と即座にお話しされました。それは私たちが旧約聖書と呼んでいるイザヤ書56章の言葉です。イザヤ書は全部で66章あります。紀元前8世紀～紀元前5世紀頃までの約3百～4百年の年月に生きた預言者たちの言葉集です。一人の預言者ではありません。イザヤ書全66章は3つに分けることが出来ると考えられます。第1イザヤは1章～39章で、国際政治の危機迫る中で国内での社会的不正義・道徳的墮落・不信仰に対するイザヤの忠告とメシア出現への希望です。第2イザヤは40章～55章で、バビロン捕囚の時代に解放されることへの希望と期待が書かれています。そして、第3イザヤは本日の56章～最後の66章です。バビロン捕囚から解放され祖国に戻り、祖国再建への実態に対する幻滅に打ちひしがれている中で希望を見い出そうとする内容です。

第3イザヤの出発はイザヤ書56章に1節に書かれています。〔(イザヤ書56:1)主はこう言われる。正義を守り、恵みの業を行え。わたしの救いが実現し、わたしの恵みの業が現れるのは間近い。〕 皆様はこの僅かな文字をどの様に感じられるでしょうか。希望の光が見えて来たのです。でもよく注意して下さい。希望の光はタダではありません。ここで注意ですが、私たちは物をタダで、無料で貰えると勘違いするのです。或いは、誰かがやってくれる、政府が面倒を見てくれると言う、タダ乗り意識です。お金が安い方が良い、得を

したと考えますが、安物買いの銭(ぜに)失いになります。水も空気も健康も安全もタダではありません。先程も申しあげました様に、何かを得るには対価を払わねばなりません。この56章1節には「正義を守り、恵みの業を行え」、それが払うべき、行うべき対価なのです。2節には「安息日を守り」、4節には「わたしの契約を固く守る」ことが最低条件なのです。約束を守ることが出来ないならば、約束を守るようにする、その為に「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くす」のです。6節に書かれている「主のもとに集って来た異邦人が」「わたしの契約を固く守るなら」どの様になったのでしょうか。7節には「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれる」、即ち、守られる、主の民とされるのです。羊の群れの外にいた羊が主の恵みの御守りの中へと導かれます。8節には恵みの御手が私たちを招いておられることが書かれています。〔(56:8)…主なる神は言われる／既に集められた者に、更に加えて集めよう、と。〕 私たちもこの祈りの家に招かれようではありませんか。

・・・お祈りします。

イエス・キリストの主なる神様。私たちはあなたの御恵みによって生かされていることに感謝いたします。主イエス・キリストのお誕生を迎えました。加えて、新しい年を迎えました。本日は1年の初め、新年礼拝です。これからの1年間の日々の御守りに感謝いたします。

人生の安らかな時にも、辛い日々にも、あなたに向かって祈ることが出来ます様にお支え下さい。

神が創造されましたこの地球上に生きる一人一人に平安・

平和・希望が与えられますように。食べ物が乏しい人々に、災害や戦争の只中にある一人一人に慰めがありますように、お守りください。私たちに知恵と勇気をお与え下さい。…教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している一人ひとりに、主なる神の御恵みと平安がありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。 アーメン